はい、私の弟は幽霊です。

がらんどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はい、私の弟は幽霊です。

【Ｎコード】
Ｎ０３５６Ｕ

【作者名】
がらんどう

【あらすじ】
社会人２年目。
酔い潰された私が家に辿り着くと、そこには４年前に死んだはずの弟が居た。
帰って来た弟と暮らす日々の中、私は自分の中に眠っていたモノと向き合っていく。
夢か。現実か。

忘れた過去か。思い出せない思い出か。
幽霊と暮らす、非日常な日常譚。
流されていく日々は、どこに辿り着くんだろうか。

come back おとうと ― evening

その晩、私は酔っぱらっていた。というか、酔いつぶれていた。
終電で一駅乗り過ごしたせいで隣駅からタクシーを使うハメになるし、マンションの前で降ろしてもらっても自分の部屋まで戻る僅かな距離で、何度も転びそうになった。
「くそー、村上のヤツめぇ……」
マンションのエレベーターに乗ってようやく悪態をつく余裕が出てきた。
飲み会でこちらが散々になるまで飲ませてきた上司の名前を化けて出るかのように呟く。
最近疲れが溜まってたのかなー、と考えるも、それどころではない。
まっすぐ歩く事だけに集中して、部屋の前につくとそこには

「よっ、姉ちゃん、元気だった？」

弟が居た。

「……なんで居るの？」
「ま、それは後で説明するからさ。とりあえず中入ろうよ」
悠紀。
私の弟。
勝手知ったるといった感じで私のバッグの中をあさると、昔から使っているポーチを開いて鍵を取り出す。
「ちょっと勝手に」
「姉弟なんだからいいじゃん。さ、入るよ、靴ぬいでー」
酔っ払いの言う事は聞きませんという姿勢で部屋の中にグイグイと押し込まれる。
心は緊張していたが、靴を脱いで玄関に上がると体の力は抜けて、

その場にへたり込んでしまう。
「全く、しょうがないな」
「わひゃぁ！？」
勢いよく抱え上げられて変な声が出た。
６つも下の弟に抱え上げられるとは驚くやら感心するやらだ。
昔から可愛がってあげた甲斐があるというもの。
姉を助ける精神はこの４年間でも全く衰えなかったらしい。
このままベッドまで運んでもらお～、とか思っていたのだが、予想外の場所で立たされる。
「洗面・・・所？」
「そのまま化粧落としたら明日後悔するよ。俺は酔いがさめるもの作っておくから、ちゃっちゃとその厚い化粧を」
ピシャンと扉を閉めた。
いや、本当はばたんっ！と強烈な音がしたのだけれど。
姉に優しい弟は構わなくていいところまでキッチリと見ていやがるようです。
とっさに「一日くらい平気だから！」とか出てこなくなった自分が……くそう。
これで出てきたものがまずかったら盛大に文句いってやるんだからな！！

「ありがとうございました。ごちそうさまでした。」
「いえいえ、お粗末さまです」
盛大に息をまいて管まで巻いてやろうとしていたのが、このザマである。
まさか酒のつまみにと買っておいた刺身と朝の残りご飯で茶漬けを作るとは、さすがである。
母さんと二人で可愛がって育てただけはあって、この弟、家事全般に対する女子力はハンパないのだった。

「食器は片付けるから寝ちゃっていいよ」
「食べてすぐ寝たら牛になっちゃうじゃない……」
「……」
悠紀がこっちを見て目線を動かす。
腹と胸を見るな。見比べるな。
呆れたようにため息をついた弟は食器を運んでゆく。
「昔から言ってるだろ。姉ちゃんが牛になるのは」
「胸だけだって言うんでしょ。っさいわねー」
生意気になってきてからは散々繰り返したやりとりだ。
それも今となっては懐かしい。

悠紀の居なかった四年間で、私は凄く変わった。
洗い物を終えた悠紀が部屋に戻ってくる。
上に座られて、潰されたお気に入りのぬいぐるみが哀れだ。
彼女を救ってやらねばと思い、私は
「ユーキ」
と彼の名前を呼びながら、ベッドの隣をポンポンと叩く。

困った顔をしながらも、悠紀は私の隣に座ってされるがままに頭を撫でさせる。
可愛い弟。
生まれが2歳しか違わなかった悠紀とは、小学校も中学校も高校も一緒だった。
細い首筋。鎖骨と血管が浮き上がる男にしては白い肌。手入れして、毎日いじってきた髪。
その一つ一つに触れていく。
くすぐったがる弟の意見は全て却下だ。
姉には弟をオモチャにする権利がある。あるのだ。
やがて大人しくなった悠紀は一点をじっと見つめている。
その目線の先には壁にかかっているカレンダー。

掛けているだけで予定もなにも書き込まれていない。
弟の目線がどこに釘付けになっているのか分かってしまった私は、
少し躊躇したけれど、聞いてしまった。

「ねぇ、ユーキ。君は今幽霊なのかな？」

「……だと思うよ、姉ちゃん」

come back おとうと ― morning

「ねぇ、ユーキ。君は今幽霊なのかな？」
「……だと思うよ、姉ちゃん」
あまりにもあっさり答えられてしまって、言葉が続かなかった。

私の二つ年下の弟は、四年前に亡くなっていた。
高校を卒業したその日に亡くなった弟が、４年前と寸分違わぬ姿で、目の前にいる。
これは私の夢なんじゃないか。
疑念が拭いきれなくて、弟の体をマジマジと見てしまう。

「足はあるけど？」
足首辺りをおもいきり掴むと悠紀に手を払われてしまった。
「あるね。ついでに言うと、壁は通り抜けられないし、重さもちゃんとあるみたい。ほら」
そういってベッドの上で悠紀が体を揺らすと、ベッドが軋んで大きな音を出す。
「姉ちゃんを待ってる間、お腹も減ったしさ。案外幽霊って、こうやってすぐ近くにいるのかもね」
まったく緊張感のない返事だけど、悠紀の目は真剣だった。
「もしそうだったら面白いけど、信じられないわね」
目の前にいるのはどう見てもただの人間だ。普通に会話して、あったかくって、重みもある。

悠紀は、本当は死んでないんじゃないか。

一瞬そんな考えが頭をよぎって、かぶりを振る。
そんなわけない。

だって、私は覚えてるじゃないか。
お互いにじっと見つめあったまま固まっていると、目線をそらされてしまう。

気になる事はたくさんあるのに、どれも頭の中で言葉に出来ない。
どれくらい過ぎたのだろう。
時計が立てるカチカチという音と居心地の悪さにいたたまれなくなった頃に、悠紀が口を開く。
「俺の葬式ってやったの？」
唐突に聞かれた質問は、普通に生きていたら一生聞かれない内容だ。
けど、意外ではなかった。
さっき私が思い出して、口に出来なかったのも、まさにその時の記憶だったからだ。
「死体がなくても葬式ぐらいやると思うんだけど、俺の場合死体もあったでしょ？」
「うん。やった」
弟の死に顔なんて見たくも無かったが、幸いながら（というのもおかしいが）顔に外傷は無かったので、とても綺麗だったのを覚えている。
「じゃあ、俺はもう死んでるんだよ」
ゆうきの声に陰りは全くなかった。
そうだったらいい。
だけど、私が欲しい答えが帰ってくるたびに、これは夢なんじゃないかと心配になる。
そして、もしこのまま寝てしまったら、夢から覚めて玄関で一人潰れているかもしれない。
不安の中に眠気が混ざり始める頃、こんな事を聞いても仕方がないと思いながら聞いた。
「ユーキ、これからどうするの？」
夢に続きはない。

ただ、私の妄想が脳内で寄り集まるだけ。
「わかんない。ただ、とりあえず、姉ちゃんのそばにいるよ」
あまりに期待通りな言葉に、考える事を諦めた。
明日居なくなってたら、今年の墓参りは行ってやんないから。
負け惜しみのセリフはちゃんと言えただろうか。
ただ頬を伝う感触を感じながら、私の意識は落ちていった。

朝。
目が覚めてぼんやりとしていた私は、キッチンから漏れる調理の音で跳ね起きた。
「ユーキ！？」
足音も気にせずにキッチンに駆け込むと、そこには呑気に卵を焼く弟がいた。
これも夢の続きなんだろうか？
寝て起きる夢で目が覚めたら月曜の朝とか、そんな最悪の展開なんじゃないだろうか？
「大丈夫、夢じゃないし、早々居なくならないよ。っていうか消え方なんてわからないし」
あぁもうこいつは。こっちを見ないからそんな事が言えるんだ。
私がどんだけ、溢れてきて意味わかんないことになってるか、こいつは全くわかってない。
今更振り向かれるのも恥ずかしくて、後ろから抱え込む。
昔は上からだった。今は肩に顔をうずめさせている。
四年前、既にこんなに大きくなっていたんだ、こいつは。
「ほら、姉ちゃん泣いてないでどいてよ。せっかく姉ちゃんの好きな半熟にしたんだから」
まったく、どこまでも良くできた弟なのだった。

ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ　おとうと　―　ｍｏｒｎｉｎｇ（後書き）

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ、完です。

この長さなら分割しなくても、良かった、か、も……

What's about my Star ― 01

その日、私は人を待ちながら喫茶店でノートパソコンを猛烈な勢いで叩いていた。

休日の静かな喫茶店の中で、響くキーボードの打鍵音。押さえようと思っても苛立ちでエンターキーをいつもより強く弾いてしまう。時計を見ると、待ち合わせの時間１０分前だった。

久々のデートだというのにいきなり休みに出てきて資料を作れと言われ、断る代わりに送られてきたファイルをメモリーの許す限り開きまくり片っ端から処理する。全てのファイルに署名をして圧縮して送り出そうとすると、待ち人がやってきた。

「ごめん、待たせたね……怒ってる？」

待ち合わせには遅れていないのに聞いてくる。彼は何事にも几帳面な性格で、そして一言多いのが玉に瑕だ。何かにつけて真面目に捉える彼の確認癖も、数年来の付き合いなら気にもならない。付き合い始めた時には「怒ってなんかない！」と怒ったりもしたことを思い出して、ふっと肩の力が抜ける。

「休出で仕事しろって言われて、会社出る代わりにカタしてたの」

少し嬉しそうな顔をしてから、申し訳なさそうに「なんだったら時間を遅らせても良かったのに」なんて気の利かないことを言ってくる。ほんと、気の遣うところがズレてる男だ。これで案外お互い気を使わなくていい時は一番気楽な相手だったりするので、気を遣ってもらったという事実だけ受け取る事にする。

メールが送信されたことを確認して席を立つ。仕事の事はもう忘れよう。知った事か！

「もう終わるし、映画も始まるから、行こ」

お疲れ様、と如才なくレシートを奪われて、甘える事にした。

突然現れた弟に心かき乱されたのが昨日の夜の出来事だ。
家にいても何を話せばいいのか分からず、ＴＶを付けっぱなしにしてお互い半日黙り続けた。終いにはユーキの唯一の弱点、空気を読まないギャグが炸裂し「まるで喪中みたいだね」という暴言に頭を一発引っぱたいて更に空気が悪くなった。
そんな時、填島さんからデートに誘われたのは渡りに船だった。けれど、一番落ち着く相手と一緒にいたいと思ったのも確かだ。
ユーキは「誰？彼氏？」としきりに気にしていたが、家で一人気を揉んでいるといい。
どうしようもなくただ頭を捻るとき、ユーキは部屋の中をぐるぐる歩き回って考えを整理する癖があったのを思い出す。
今頃私の部屋で、昔と同じようにしているのかと想像すると、少し気持ちが晴れてきた。
前向きになれた所で、私は今日の目的が映画鑑賞だったと思い出す。
「そういえば、今日は何を見に来たの？」
填島さんは映画オタクだ。チェーン（という表現は間違っているらしいが）の映画館ではないところを休日は渡り歩く。付き合っていた時なんて、月間のイベントで開催される「毎日違う白黒の名画を上映する」イベントに全日参加して私との約束を蹴った事もある。
とはいえ、彼の映画を選ぶセンスは私の趣味とも合致する。
最近公開されたブルース＝ウイルスのやってるアクションとか女海賊の活躍するクイーンオブパイレーツは正直あんまり好きじゃないなー、と考えていると
「今流行ってる奴は好きじゃ無さそうだったから、ちょっとマイナーな奴を見に行くよ」
そう言って前を行く。
ビル街の路地を抜け、坂道を登りきると小さな映画館があった。
「一階建て……？」
「いや、地下にあるんだよ。マイナーな映画や、日本では吹き替え

版が作られないような映画ばっかりをやってるんだ」
饒舌が止まらなくなった填島さんの説明を要約すると、ここは「字幕は作られるが吹き替え版が作られない程度の人気作」を上映しているらしい。
話は半分聞き流しながら、改めて上から下まで眺めてみる。コンクリートで作られた古い質感のある外壁。狭い階段。そうと知らなければ通り過ぎてしまうような佇まいが、逆に気に入った。
いつの間にかチケットを買っていた彼に腕を引かれる。
「今日見るのはこれだよ」
渡されたチケットに書かれたタイトルをどきどきしながら確認する。

『ＩＦ　ＹＯＵ　ＣＯＭＥ　ＢＡＣＫ』

なんだか、嫌な予感がした。

人間という生き物には嫌な予感ほど的中するよう機関が存在する。これは全世界共通認識でありグローバルな常識だ。学生の頃は友人達と本気で言い合っていたが、別に今だって白熱して主張できる気がする。大学の卒論にしたって良い。いや、卒論にするなら幽霊の話にした方がいいか……。
映画の内容は「幼馴染で恋人だった女の子が幽霊になって戻って来た」というシナリオだった。もしかして填島さんには予知能力か何かがあってこの映画を選んだ……わけは、ないな。うん。
填島さん。填島道和。彼は３つ年上の元恋人だ。私が大学１年の時から付き合っていたけれど、彼の卒業と同時に恋人関係は終了した。
理路整然としていて自信と実績がある彼は傍に居れば非常に安心できる存在だった。まっすぐすぎる性格は気持ちのいいものだった

が、いかんせん天邪鬼の私とはかみ合わないタイミングが度々訪れる。
険悪な終わり方を回避して、「末永くお友達で居ましょう」という結論をお互いが持ち出したのは、填島さんも私を大切に思ってくれているからなのだと思う。そう思い込みたいだけなのかもしれないけれど。

映画館の中は狭くて、人も少なかった。
だというのに、彼はただじっとスクリーンを見つめている。私が彼の横顔を見ていても気付きもしない。これで柔軟な行動力さえあれば、恋人候補をすっとばして旦那候補だったりするのだが……世の中完璧な男なんていやしないわね、と嘆息。
そういえば填島さんは映画を見終わると、いつもどこかに連れて行ってくれたっけ。大抵は感想を言い合いたいらしくその手の会話ばかりもちかけてくる。ふと思い出した私は分かっていながらケンカもしたくないので、再びスクリーンに意識を戻すことにした。
物語は幽霊との再会を扱うなら妥当な筋書きで進んでいった。弟が蘇って来た（ちょっと違うか）私が保証しよう。
まずは彼女の存在を疑い、第三者を交えた交流で彼女を再認識する。将来の事を不安に思いつつも、彼女と再び親密な仲になる。そして彼女の思い残した事を解決した事で、幽霊は成仏した。
映画の締めは彼女が自分の子供として転生（おい！）して、仲良く家族として暮らしました、とのことだった。
この家族、娘が成人したら大丈夫なのだろうか。娘から見た母親とか妻から見た元恋人とか。どっちかというとそういう泥臭いロマンスな物語の方が好みかも……。
とか余計な心配はおいといて、私としては『ＣＯＭＥ　ＢＡＣＫ弟。なう。』なわけで、非常に感じ入ってしまったのである。

「もし、填島さんにとって大事な人が戻ってきたら、どうします？」
映画を見終わった後、軽くダーツ等で楽しんでから、彼のオススメのお店に入った。食事も終わってお酒に口を付け始めたタイミングで私から切り出した。
正直に言おう。私が欲しいのは、半分が映画の感想で、半分は私が抱える問題の回答例だ。
「どうします、とは、また答えにくい質問だけど」
とは言いつつ、既に彼の中である程度の答えはあるんだろう。自論を展開したい男特有のウズウズが伝わってくる。けれどそこで勢いに任せて口を開かず、一度自分の中に言葉をためるのが、彼の好きなところだ。こういった事の積み重ねが、私の中の彼に「落ち着いた大木」のような安心感を持たせるんだ。
彼はこういうオーソドックスな質問のやりあいが好きだ。物覚えが良くて、私が口にした好みなんかも逐一覚えていたりするのだが、こういう時そんなものは無視して自分の意見をぶち通してくれたりする。
私は映画が終わっても、答えを出せなかった。どうしたってユーキに結びついてしまう。人に言えるような意見が、固まらない。
だから、彼の答えを待った。
「僕は、多分、彼女が幽霊として確かに存在していても、彼女には依存できないだろうね。君も知ってのとおり、堅実な生き方が大好きだから。いつ消えてしまうとも分からない相手に恋はしないようにすると思う」
がっかりだ。思っていた以上にロマンがない。けど、がっかりするくらい現実的な意見は、期待通りの出来栄えだった。
「じゃあ、もし私が死んでしまって、幽霊になって戻ってきたら？」
「……恋はしないようにすると思う」
言外に「今もそうだ」と言いたそうな顔をする。まさに苦虫を噛み潰したような表情だ。
大人びている彼には普段から敬語を使って接してしまうが、こう

いう時は普通にカワイイ男の子の顔になる。もう少しからかってみようか。
「でも、もし生き返ってきた女の子の希望が映画みたいに『彼とまた結ばれる事』だったら、填島さんは一生そんな慕ってくれる子と一緒に生きる事になりますよね？」
「相変わらずロマンチストだな、君は。僕の元に幽霊として現れる相手が必ずしも恋人候補とは限らないだろう。どうする、黒人男性の幽霊に憑かれでもしたら」
「夢が無いですよ。恋愛映画の例えを、ただの怪談（いや、恋愛ジャンルになるか……？）と一緒にしないで下さい」
「楽しい夢ならいいんだけど……恋をしたら消えてしまう幽霊の元恋人なんて、僕にはそんなつらいシナリオの主人公になれる度胸は無いよ」
彼らしい答えだ。だけど多分、世の中のほとんどの人が、彼と同じだろう。格好をつけたくたって付けられないことはある。

私は、どうなんだ。
私とユーキの関係は、物語のようにきれいにエンディングを迎えられるんだろうか。
思わずため息が出る。ユーキが死んでしまった時だって、事実をすんなり受け入れられなかった。いずれ消えるのが分かっているから心の準備をしろといわれても無理だ。私はそこまで思い切りのいい人間じゃない。
自分の一般人さ加減にもう一度深いため息をつく。填島さんが黙っているのを感じて顔を上げると、彼は私の目をじっと見つめてくる。
告白されたときと同じ。いっとうマジメな時の、ドキドキして受け止められないくらい力強い目だ。
「でもね、一条」
目線は合わせたまま、彼が呟く。

「もしそんな状況になったって、それを終わらせなくちゃいけないわけじゃないだろう。お互いが納得する関係なら、幽霊とでもずっと一緒に居られると、僕は思う。

なんでもかんでもよく出来た小説のように1か0で決着をつけなくちゃいけないなら、今こうして僕らが会っているのも間違いになってしまうよな。

僕は、今の君との関係に満足してる。だから、そういうのもアリだと思う」

言い切った彼はウェイターを呼んで会計を済ませ始める。彼は言いたい事を言うだけで、私の返事を聞こうとはしない。普段の、我の強い私なら苛立つけれど、ブレない他人の言葉は、とても心地よかった。彼と居るときは、いつでも何かに惑っている私であればいいのに。

填島さんが……道和が、こう答えてくれると期待したから私は彼と会うことにしたんだろうか。彼の真っ赤になった耳を見て、ごめん、と、ありがとう、を同時に思いながら、道和の腕に身体を絡ませて、店を出る。

今日はまっすぐ家に帰ろう。途中で弟の好きなチーズケーキを買って帰ってやろうと決める。子供のように嬉しそうな表情で食べる所も、変わってないんだろう。

そんな光景を想像して、そっと笑みが浮かんだ。

What's about my Star ― 02

弟との間には、協定が出来た。
「つまり、あまり深く考えずに一緒に住もう」
「うん。さんせー」
ユーキはケーキを食べながら、うんうんと頷く。女の子でもめったにしないような幸せそうなツラだったが、本当に話を聞いているんだろうか。
しかしまぁそれは私の杞憂で、翌日からユーキは家事を積極的に手伝うようになった。というか、家事の主担当として動き始めた。曰く、「俺は身元も保証できないからまともに働けないし、これぐらいはしないとね」、と。
そんな事をさせるために置いてるんじゃないんだからねっ！と言いながらも、日々残業して帰ってくる私にとって、弟の協力は非常に助かるものだった。非常に。
女物の服の洗い方から健康的な食事まで提供してくれて、それでいて弟である。彼氏にこんなことさせようものなら何らかのわだかまりも生まれようが、弟である。
一週間、二週間とそれが続くうちに、凝り固まっていた私の心は少しずつ解(ほぐ)れていった。
気兼ねもなく全てを任せられる家族という存在。
彼の存在に私の心が”たるんだ”時。私はとあるミスをやらかした。

『お客様に出す見積りを間違えた』。
企業を相手にしている社会人の方ならこれがどれだけ大変なミスなのか分かるかと思う。しかも概算見積りではなく、それが検収書だったので笑い事では済まない。

そりゃあ私にも言い訳はある。
そのための教育を受けさせられていない社会人2年目にそんな仕事を丸投げしてしかもチェックしたはずの上司がそれを素通ししてお客様に出したというのに客先で責任を私1人に押し付けあげくの果てにそれを笠に着て居酒屋でサシ飲みなど、あぁもう！冗談じゃない！
これが明らかなセクハラだとしても、会社に大赤字を出させてしまうところだったというのは心を酷く萎縮させた。社会人二年目じゃ１００Ｍ（Ｍはメガで百万の事らしい……つまり１００Ｍは一億だ！）なんて数字、よくわからなくておっそろしい物なのだ。
タバコとコーヒーと加齢臭と汗の混ざった悪臭を前に作り笑いを続ける元気も無くて、お酒を入れすぎたのもまずかった。
ろれつも回らなくなっていた私は、店を出たタイミングで帰るとも言い出せず、そのまま次の店を探しに行くことになった。
そして、気付いた時には飲み屋もほとんどなくなっていく道を辿っていたのである。
（である、じゃないでしょ私！？）
あたりを見回してみれば、一般的な居酒屋はなくなり、この不景気でもピンクのネオンを輝かせているエリアに足を踏み入れていた。
まずい、と頭の中で考えてメールをさっと打って送る。
けれど同時に、今回の事を会社で詰(なじ)られたら、居場所はないだろうなと打算が働き始める。
私の左隣（近すぎる！）を歩いている村上は、オッサンだがオッサンなりに地位も高い。このオッサンを毛嫌いしながらも相手をして評価を上げてもらっている女もいる。もちろん一線は引いた上で、だが。
あぁでもこれがまだ5歳年上のイケメンならまだしも、子供も居るオッサンだぞ？いくらなんでもそこまで私のプライドは安くない。けれど、こんな中途半端に会社をやめてまた就職できるほど高い価値のあるプライドでもないんじゃないか……。

うだうだと余計な事を考えていた私は、溝に気付かずヒールを突っかけた。
しかも間の悪い事に突っかけたのは左足でこれはオッサンのほうに倒れると。
（最悪だ）と思いながら来たるべき悪臭にそなえて息を詰めた私は、右から差し出された腕に支えられた。
「大丈夫、茜？」
私を受け止めてくれた腕と声は嫌らしい上司のものではなかった。
１６０センチの私から見てもうざったいくらいに足長の高身長（１８０ｃｍ）で、女よりもサラッサラな髪。そして黒のジャケットにワインレッドのシャツ。
「ありがと、蒼（そら）」
良かった。少女マンガのヒーローみたいなタイミングで現れてくれた彼に、少し涙が出る。
神城　蒼。見ての通り、ホストだ。けれど彼とは大学時代からの知人で、ホストを始める前からの付き合いがある。ホストに知人を作りに行けるほど勇気のある性格じゃない。
かなりのイケメン登場に、村上は目に見えて動揺し、顔中に汗が浮いている。
「いやいや、ツレを支えてくれてありがとう。ほら、大丈夫かね一条君」
オッサンが手を伸ばしてくる。そりゃ今にも手篭めにしようとしていた若い女性をホストに掻っ攫われようとしている（ように見える）のだから、さっさと取り上げてどこぞなりとも連れ込みたいところなのだろう。
寸前で「任せてもらっても良い？」と小声で訪ねてくる彼に、服を思いっきり掴んで返事をすると、村上の手が私に軽く触れた所で、蒼がそっとその手を弾いた。
「なっ、君！」
「茜の上司の方ですか？すいません、せっかくの金曜に申し訳あり

ませんが、彼女も具合が悪そうなのでこちらで引き取ろうと思います」
気分悪いだろ？と訪ねてくる声に弱々しくもはっきりと頷いた。
「いや、部下をホストに預けるのもあんし」
「彼女と僕は恋人ですから、ご安心下さい」
上司の反論を待っていましたとばかりに遮ると、そこで蒼は信じられない事をしでかした。
私の細いヒールを踏みつけて折ると、倒れそうになる私のお尻を支えやがった。支点を低くされた私は倒れないまでも、上半身は大きくのけぞって。
「…！？」
声をあげるより早く唇を塞がれた。
「なっ、が、君！？」
こんなところで、と言おうとしているのかもしれないが、あいにくここは大人のお店が集まる地区だ。
周りを見渡す冷静さがあれば、そこらじゅうで似たような二人組が眼に入る。もっとも、こんな所にくる人間に冷静さなんて有って無いようなものだと思うけど。
下着姿の（ような？）女性は居るが、さすがに往来のど真ん中は私達しかいない。
軽くパニクってしまったが、彼の服を掴む手を緩めれば後ろに倒れてしまうので、止む無くその姿勢が数秒続いた。
息を吸うタイミングで舌を入れようとしてきたので軽く唇を噛んで止めさせる。
少し顔をしかめながら、蒼はジャケットの内ポケットから何かを取り出した。
「代わりというわけではございませんが、上司の方には安心して楽しんでいけるお店をご紹介いたしますので、こちらの方で楽しんでいただけますか？」
蒼が懐から取り出したカードには、下着姿の女の人が写っている。

多分キャバクラか何かのお店のだろう。
私から隠すかのように（はっきりと見えているのだが）山下に手渡そうとして一旦引き戻し、自分のサインと５０％ＯＦＦと書きなぐってから手渡した。
「このようなものですいませんが、これを見せて一番人気の子を頼んでください。半額でご満足いただけるまで楽しませてもらえるはずです」
オッサンの顔がにやけて返事を返せないうちに、私は彼に抱えられて運ばれていった。
「あ、あぁ！すまんね！知り合いだというのならお任せしよう！頼むよ君！」
村上は私の視界から一瞬で消えると、早足でその場を去っていった。

近くの公園（といってもビルとビルの間の隙間にベンチがあるだけの場所だが）まで連れられて、そこでようやく落ち着いた私の第一声は
「やりすぎ」
だった。
当然だ、天下の往来で（と言えるほど胸を張れる場所ではないが）キスを、しかも会社の上司の前でやるとは何事か！
我ながら完全に酔っ払いの管巻きな口調になっていた。と、思う。
一通り聞いた蒼が、買ってきた缶ジュースを私の頬にあててくる。
あ、ＮＥＣＴ●Ｒだ。これ好きだけど最近見なくなってきたんだよなぁ……ジュースでほだされてる間に、蒼は自然に隣に座ってくる。
「たしかに、茜の言うとおりだ。でもあれくらいやらなきゃ駄目なんだよ」
目の前に立っているホストは、しれっと言ってのける。

「大体さ、『じょうしに、ぴんななにつれてかれる。へるぷ』なーんてメールで駆けつけてくれる男にはまず言うことあるんじゃない？」
「……ありがとうございました」
ピン七はあのまま進んだ先にあるホテル街の通称だ。
蒼がその手前のクラブで働いている事を思い出した私はとっさに彼にメールを送ったのだった。
こいつは、私に対して非常に甘い。私がユーキにするのと同じ以上に甘いと思う。彼が困っていても私は仕事を抜け出して彼を助けに行くだろうか。そう考えると、いや、よく考えないまでも、彼に感謝こそすれ、苦情を言う立場ではないんだけど、お酒が入っているとどうにも素直に人の言う事は聞けなくなる。
「でもさ、ヒール折るのはやりすぎだよ」
「社会人2年目の女に会うモノくらいならプレゼントするよ」
「同い年のくせに生意気。キスとか会社で広められたらどうすんのさ！？」
「これから家まで送るから、途中でプリクラでも撮ろうぜ。ちょっと化粧落とせばケバくないＮｏ．１ホストと２ショットの出来上がりだろ」
「それがどうしたのよ。女の子の間で噂が広まると大変なのはあんたも分かってるでしょ？」
「学生時代からの付き合いのホストに助けられたって素直に言えばいいじゃん。人に好かれるオッサンには見えなかったし、理由話せば助けてくれる女の子くらい回りにいないの？いないなら俺の店に連れてくれば説得してやるけど」
「……」
どうにも騙されている気がする。そんなに単純じゃないんだよ！とか、むしろイケメンの偽装彼氏なんて作ったら本当の彼氏が出来なくなるだろ！とか。思いはするんだけど、どうせ口八丁で私の反論なんか潰されるんだろうと思うと、ため息しか出なかった。

蒼と知り合ったのはホストになる前、彼が組んでいたバンドのライブに連れて行かれたのがきっかけだった。何の因果か、私を連れて行った女の子には目もくれず打上げの二次会で手際よく連れだされバーに連れられて後はなし崩しだった。

私としてはホストと個人的な付き合いがあるとは思われたくないが、出会いからして大して変わらない気が……。いやいや、なにせ一度もホストクラブなんていった事ないのだ。そういうのが好きな子だと思われて会社の女に連れられるのは困るなー。同期の女の子も美少年喫茶とかに通いつめてカードの額がやばいことになってる子がいるし。ちょっと違うか？

私が一人で唸っている間に蒼はジュースを飲み終えたらしい。握りつぶした缶を投げるとキレイにゴミ箱にシュートがキマる。子供っぽいキザな態度が妙にハマるのが、こいつの長所で短所だ。

さて、と声に出しながら立ち上がると、蒼は手を差し出してくれる。

「納得していただけたなら、家まで送りますよ」

ポケットの中からキーを取り出してくるくる回している。

私の上げたキツネのストラップの尻尾つかんで振り回すのはやめなさい。

「いや、そうじゃなくて。仕事中でしょ？お店に連れてってくれれば、給料日の後だし多少は」

勢いよく立ち上がった所で抱きしめられる。痛くないのに苦しい。苦しいのに嬉しい優しさ加減はさすがだった。

「オレはお前だけは絶対に客に取らないし、お前の為にやりたくてやってるんだ。受け取ってくれないほうが、つらい」

「……ごめん」

「それじゃ待たせても不安だし、ちょっと歩くよ」

ちょっと迷ってからもう片方のヒールも折って歩きやすくする。

カカトをぱかぱかさせながらふみ心地を確かめているところで、ユーキの事を思い出した。

蒼には”死んだ弟がいる”ことを話したことがある。今、私の部屋にこられるのはマズい。
「ねぇ、……今日は蒼の家に行っていい？」
理由は聞かずに蒼は「汚いよ」とだけ答えて、私の手を引いて歩き出した。
わがままばかり言って、ごめん。
聞こえてたか分からないけど、強く握り返してくれた手のひらのあったかさが、心地良かった。

What's about my Star ― 03

さて、実際に目の当たりにした蒼の部屋の惨状は酔いがさめるほどに酷かった。

お客さんのツテで住んでいるやけに広い２ＬＤＫには、２メートル程もある本棚に入りきらない本や雑誌が散らばっていた。職業柄か、服だけはしっかりとクローゼットに収まっていたが、部屋着は脱ぎ散らかしてある。というか明らかに使った後のタオルとかが落ちてるんですけど。くさいし。

やろうと思えば人並み以上に家事が出来るくせに、ぐうたらな性格のせいでせっかくの部屋がもったいないことになっている。

時間としては深夜で迷惑な時間だったが、このマンションが防音性能に超がつくほど優れている。

「今から掃除をします」

「……寝るだけなら、寝室はきれいなんだけど」

「お片づけをします」

私が袖を捲って意気込むと、ため息をついて蒼もジャケットを脱ぐ。

こんな時間に掃除をするなんて常識的ではないけれど、蒼は私の好きなようにさせてくれた。何か手を動かしていたい事を見抜かれていたのか。それとも相手の言う事を一度は飲むようにしている彼の悪いクセからか。

気恥ずかしくてありがとうとも、ごめんなさいとも言えないまま、作業を続けた。

洗濯を始めて本棚に本をあらかた押し込み終わったところで、蒼が後ろから抱き着いてくる。

物を運んだり、体を動かしていたからだろう。内にこもった熱は、枝のように細くて白い腕をうっすらと染めていた。骨の輪郭が見え

るような腕なのに、ちゃんと男の筋肉がついている。そのバランスの悪さが、弟の腕を思い出させた。
少し迷ってから、私はずっと誰かに言いたかった事を、彼に聞こうと決意する。蒼なら。蒼だけは、私が何を話しても信じて相談に乗ってくれる。お腹の前で手を組んで、自然を装って聞いてみた。
「蒼は幽霊って信じる？」
口にした言葉はひどく遠回りで震えていたけど、ここ最近ずっと溜め込んできたことだ。
ユーキ。血のつながった私の弟。彼の存在。
もしかしたら彼が用意してくれてると思っているご飯とかにしたって、私が無意識のうちにやっているかもしれない。ありえないと思っても一旦そんな事を考え始めてしまうと、不安になってしまう。
体の前で組んだ私の手をとって両手で包み込むと、少し悩んでから彼の声が耳を打った。
「信じるっていうか、そこに居るんだけどね」
「……はっ？」
えっ、今なんて言った。
「そこの窓の外のベランダに飛び降りした人がいるんだけどね、飛び降りては翌日また戻ってきて、また飛び降りてを繰り返してるんだよ」
「あ、いや、ちょ」
「例えば、そこらの道でもうずくまってたりする霊は結構いるよ。見えない人が踏んづけて憑かれてたりするんだけど」
「ストップ！」
真上にある顔を覗き込むと、蒼がにやにや笑っていた。
「……カラカイマシタカ？」
「まさか。オレが幽霊の存在を信じてるの、分かって欲しいだけだよ？　で、だ。これで弟さんの霊についても話してもらえるかな？」
「はぁっ！？」
今度は本気で叫んだ。

「えっ、なんで？」
「つーか、さっきからそこに居るんだよね。別に追い出しゃしないから、出てきたらどうよ、悠紀クン」
蒼が入り口のほうを見ながら一声かける。
まさかぁ、と思って瞬きをした瞬間。そこにはユーキが居た。
「お姉ちゃん思いなのはいいことだけど、人んちに勝手に上がりこむのはダメだろ。幽霊でもモラルを忘れちゃだめじゃん？」
「……すいません」
唖然として私が見つめていると、蒼は私の事など気にも留めずに3人分の飲み物を準備した。ちょっと手際が良過ぎやしませんか、蒼さん。
私があまりの事に黙っている間、ずっと蒼はユーキを質問攻めにしている。死んだときの事は聞かずに、私の話ばかりを聞いていた。話が遡って学生時代の私の恋人の事を聞きだそうとしたところで脇をつねって割り込んだ。
「それ以上は聞かなくてもいいでしょ」
「いや、学生時代に茜が付き合ってた男の話とか知りたいじゃん」
「じゃん、じゃないよ。そんなこと知ってどうするの！」
「そりゃもちろん、お前にとって一番の男になるためだよ」
さらっと言われて顔が熱くなる。
思わずユーキを見ると意外な物を見たように驚いている。
「姉ちゃんってこんなストレートな言葉で落ちるんだね」
「落ちてない！」
「神城さんの前でその反応は失礼じゃない？」
口が「はぁ？」と言おうとして止まる。
うん、よく考えてみれば、普通私達の関係はそう見えるだろう。
だがしかし。弟の勘違いは是非ともここで正さねばならなかった。
あんたが言いなさいと睨みつけると、蒼はロックで割ったグラスを一息に飲み干して
「悠紀。茜は俺の彼女」

「蒼！？」
「だった。しかもコイツから告ってきたのに、三日で俺が振られた」
「姉ちゃん！？」「ちょ、それは言わなくていい！」
久しぶりに会ったから、蒼はこういう性格の悪いところを忘れていた。弟の呆れた目線がいたたまれない。
「いや、まぁ確かにそういう事実はあるのだけれども、こう、血の迷いでね？」
「……自分でネタを振っといてなんだが、この刺さるようなフォローはどうにかならないのか、君のお姉さん」
「……す、すいません」
何であんたが頭下げるのと怒鳴りたくもなるが、男二人でわかりあったようにグラスを合わせてあぁもうムカツクなぁ！
「細かいすったもんだはいくつもあるけど、オレと茜は最初に会った時から今の今までずっと”仲良し”だよ。彼氏より距離のある関係だけど、それでずっと上手いことやってる。ホストに連れ込まれるお姉さんが心配なのは分かるけど、納得？」
「はい、安心しました」
「うん、良かった。それじゃ、今夜はオレに茜を預けてもらっていいかな？」
「お願いします。明日迎えには」
「いや、ちゃんと返すから、悠紀は家に帰って好物でも作って待っててあげてくれ」
私の居ないところで弟の問題は全て解決してしまったらしい。つーか、いつの間にか人の弟の事を呼び捨てにしてるし。
っていうか弟公認で男の家に泊まるって……いや、お互い子供じゃないんだし、問題もないけれど何かがおかしい気がする。
結局何がおかしいのか答えを出せない間にユーキは帰ることになり、私も頭がついていかないまま「気をつけてね」なんていいながら悠紀を送り出していた。

部屋に二人残された後は、会話もないまま蒼が作ったカクテルを飲んでいた。
甘くておいしいけど、実は結構強いお酒を飲まされているのに気付きながら、出されたものを一通り空ける。
「で、悠紀くんの何が気になるわけ」
私がまともにしゃべれるギリギリのタイミングで、蒼は私の一番聞いて欲しいところをノックしてきた。
「わかんない……わかんないけど」
頭の中でたくさんの事を考えてきた。この一週間でたくさん。
例えば、どうやってユーキが戻ってきたのかとか、どうして実家から離れた私の所にきたのかとか。
中学の時に５Ｗ２Ｈとかいうのを英語の授業でやったのを思い出した。けど、その全部がわかんない。
なぜ？どうして？どうやって？
「わかんないよ……」
ぐだぐだと言いたい事だけ言って、結局何一つも分かってない。
社会人として働き出して、少しは大人になったはずなのに、自分の中の感情すらまともに言葉にできない。
イライラして、すごくモヤモヤする。
蒼がじっと私の事を見ているのが嫌で、顔をそむけて体育座りで背を向ける。
グラスを置く音がして、蒼が背中を合わせてきた。
今、抱きしめて欲しくないのを分かられているのが、すごく嬉しくて、すごくむかつく。
「悠紀くんは、すぐには消えないと思う」
むかつくけど、蒼がくれた一言で私の心は凪のように静まる。こいつは、私が欲しい物を、欲しいと思う前にくれる。
「幽霊にも色々いる。俺も肉体を持ってる幽霊なんて始めてみたけど、あぁいうタイプすぐに消えたりしない。成仏でもしなければ、

って条件がつくけど」
「成仏？ユーキが？」
「思い残しも何もない魂は幽霊にはならない。俺の考えなんだけど、死ぬ瞬間に脳みそがスパークして、強烈に意識がエネルギーを持つと、霊になるんだ。
煮詰まってた問題が解決すると、頭の中が重かったのにそれがすーっと消えていくだろ。成仏ってのはあんな感じらしいよ」
あぁ、それならよく分かる。今の私がそうだから。
「じゃあ、私はユーキを成仏させてあげるべきなのかな？」
「別にそうとも限らない。ただ生きていたい、死にたくないっていう想いが強くて霊になってるやつもいる。これはオレの意見だけど」
蒼は私の背中に預ける体重をいっそう増やしてきた。ちょっと重くて、力を入れて耐える。
けど、これは嫌がらせなんかじゃなくて。いつもはふざけた態度でだらしなくて、それでいて私に頼ろうともしない彼だけど。多分、今は何も隠さずに思った事を伝えてくれようとしてるんだと感じた。
だから、私も心を開いて彼の言葉に耳を傾ける。
「だけど？」
「残るかどうかは、悠紀が決める。茜は、弟の選択を受け入れてあげるんだ」
……。
「なにそれ。私が残っていてほしくても、だめなの？」
「悠紀なら、そこも考えて決めてくれるだろ。これは普通の人間相手とおなじことなんだよ。相手の事が好きなら好きって伝えなきゃだろ。言われたほうも相手の感情を含めて自分の行動を決めるんだ。一生あえなくなるかもしれないけれど、基本は同じなんだよ」
「つらいね」
もしそうなったら、どれだけ悲しいだろう。
想像もできないぐらい大きい感情を、想うだけで涙が出てくる。
ふっ、と背中の重みが消えて、そのまま後ろ向きに倒れこむ。

器用に私の頭に手を当てた彼は覆いかぶさるように私を抱きとめて、そのまま首筋に軽く噛み付いてくる。
「あぁ、つらい。だから、ダメになる前にオレの所に来い。茜の前にいるオレは、ただ君に優しくするためだけに居るから」
うさんくさい程に気障(キザ)で蠱惑的(こわくてき)で。
それでいて、いつもよりとびきり優しい蒼にされるがまま、私は少しだけ、泣いた。

その後の事は、特筆するまでもない。
今日まで何回も繰り返してきたように、彼に縋って、甘えられて。
ありふれた恋人のようにお互いを信じて眠りにつく。
あばらの浮き出た細い体は、頼りない分、そこに生きている事を実感させる。
扁平で厚みのない骨格を抱きしめて、彼の鼓動を聞く。
彼のリズムに合わせて、頭の中に残った最後のしこりは、成仏するように溶けて血に混ざって消えた。
その時、ふと頭の中を駆け巡った一つのナニカがピンと来る。
「あのね、蒼。分かったと思う」
蒼は腕に乗っけている私の頭を落とさないように身じろぎする。
「なにが？」
頭を撫でる手が心地よくて、意識がぼやけてくる。
なんとなくだけどね。分かったの。私が一番気になること。
「私ね、ユーキがなんで死んだのか、覚えてないの……」
なんでだろう。とても不自然な事だと思うのに、考えられない。
瞼の重みと蒼の優しい手に意識を委ねて、彼の腕の中で眠りに落ちていった。

All of Reasons ― 01

事の発端は、弟の不用意な一言だった。

「姉ちゃん、相変わらず料理がへたなんだね。まぁ神城さんにもらってもらうなら必要なさそうだけど」

洗い物をしながら言うユーキは確かに料理がうまい。私は部活に入っていたけどユーキは帰宅部で、お母さんから家事を叩き込まれていた。料理が下手だの、アイロン掛けが苦手だの、掃除が雑だの、さんざん言われ慣れている。

だが、だからと言って今の失言は笑って受け流してやるわけにはいかないでしょう。

「ちょっと、なんで私が蒼にもらわれることになってるの」

「……それ、本気で言ってん？」

信じられない、と表情が言っている。

私だって分かっている。私と蒼の関係は蒼に負担がかかる一方的な関係だ。蒼は「そんなことない」というし、その負担が嬉しいと抜かしている。愛されたいタイプの人はよくそういう事を言うが、その私を甘やかす姿勢には私自身がたまにイラッとくるぐらいだ。

けれど、そんな私たちの間のくだらない価値はわざわざ弟に話す内容でもないし、口を出されたくもない。

「ユーキにゃ関係ないでしょ。夕飯の当番はユーキなんだから、黙って買出しでも行ってきなさい」

話を打ち切るようにノートパソコンを開こうとすると、遮られる。

「何すんの、乱暴に扱うな！」

「夕飯は言われなくても姉ちゃんより百倍ウマイもん作ら。姉ちゃんがんな考えじゃ神城さんが可哀想じゃん」

「何がカワイソウなの。お互い納得済みよ」

「そんなん、神城さんが姉ちゃんに合わせてるだけだら？」

うっ、と言葉に詰まる。方言が出るくらい怒ってるユーキはちょっと怖かった。そして何より私が常々不安に思ってしまって、彼をあまり頼りたくないと思うところを突かれたのが痛かったから。
「うっさいわね。一日ずっと部屋の中にいるから余計なこと考えるのよ。そういうアンタはどうなの」
「幽霊でも彼女くらいは出来る」
「彼女！？」
「んな事どうでもいいじゃん、今は姉ちゃんと神城さんの話だら」
「それこそどうだっていいわよ。あんたの話をしなさい」
「話がすり替わってる。何度も言うけど今は姉ちゃんと神城さんの話を……」
ユーキが死んでる間に４年分成長している余裕とか、そういうものはイライラの中で無くなっていた。
そんな私たちの目に、壁にかかったダーツの的が入ってくる。

『ケンカはするな。揉めたなら勝負をしなさい』という、我が家の家訓を思い出す。

男勝りなその母の教育方針から、私とユーキはぶつかるたびに勝負事をして勝者を決め手きた。
そして、長い事封印されてきたこの家訓を紐解く時が来た、と恐らく同時にユーキもそう思ったに違いない。
「……あれで勝負つけるわよ。１ゲーム勝つごとに、質問に一個答える事」
「ノった。聞き出したい事が無くなったら、その時点で終了な」
ここ数週間の家事で部屋のどこに何があるか、悠紀も把握していたらしい。
手早くフライトや予備のシャフトまで持ち出し、その間に私は表計算ソフトを立ち上げて急場の得点表を完成させる。
この間約３分。

「やるからには、負けないからね」
「手加減はしないから覚悟しなさい」

こうして、今日の勝負は私の部屋にかかったダーツでつけられることになったのだ。

All of Reasons ― 02

昔、まだ道和と付き合っていた時の事だ。
お酒を飲みながらダーツバーで彼に初めてダーツをやらせた時、私が圧勝した。以来、生真面目な彼は道具一式を揃えて猛練習を開始した。
それに合わせて私も練習を始め、二人でのめりこんでいった。
半年くらいそれを続けて2人が最終的に行き着いたのが「お互いの部屋にダーツがあればいいんじゃないか」で、「どうせなら洒落たハードダーツを始めてみようか」である。学生だったので主な理由は金欠からだったんだけど。
結果、お互いの部屋の壁に巨大なゴム板とその上にかけられたハードダーツ用のコルクで出来たダーツボードが設置され、現在に至ったりする。

閑話休題。
最初の1ゲームは私の圧勝だった。
私達が買ったのはバーとかにあるプラスチック製の先端をしたソフトダーツじゃなくて、コルクボードに鉄製の先端のダーツを投げる、ハードダーツだ。そこらで遊べるソフトダーツとハードダーツはやってみると、想像以上に勝手が違う。ダーツを投げるラインからボードまでの距離、ボードの枠の大きさ、ダーツの重量。ユーキもソフトダーツの経験があるようだが、ソフトの経験があればあるほど、ハードダーツを初めて投げる時の違和感も大きい。
（だけど、試し投げを申し込まなかったユーキが悪いもんね～）
あっさりと勝利した私は悠紀に一つ目の質問を投げる。
「彼女なんていつ出来たの。ユーキが戻ってきてから一月しか経ってないじゃない」
「先週、買い物帰りに。今までもちょくちょく見かけてたんだけど、

相手も俺の事が気になってたらしい」
なんなんだその出会い方は。せっかくの幽霊とのロマンスだというのに夢も何もない。
というか相手の女の子も買い物袋ぶら下げた男の子と付き合い始めるか……？
「相手は女だよね？」
「質問は一個って約束だけど、俺の名誉のために答えると、もちろん女性だよ。今の姉ちゃんと同い年だ。さ、早く次のゲームを始めよう」
ユーキは表をリセットすると、ラインに足を乗せた。
続く2ゲーム目、悠紀のスコアは前回よりも早く伸びたが、結局私が勝った。
ダーツで有名なゲームの一つ「01」系は最後の一投で点数がちょうど0にならなければならない。けど、ハードダーツの場合、最後は必ずダブルでなければならないというルールが追加される。
例えばラストのスコアが12なら、ソフトは12のシングル・6のダブル・4のトリプルのどこに刺さっても良いのだが、ハードでは6のダブルだけになる。
大きく外したら壁に穴を開けてしまうこともあって、中々ダーツが外に寄らなかったユーキを差し置いて私が20のダブルを刺してアガる。
2つ目の質問はプレイ中に考えていた。
「相手の子って、”幽霊”なの？」
もし、相手が生身の女の子（こんな物言いも自然に出来るようになっちゃったなぁ）だとして、今のユーキは付き合うだろうか。いやない。と、思う。
なぜなら、”いつ消えるのか分からない”からだ。だから、どちらかと言うと相手が生身だったらその手の不安はないのか聞いてみたかったのだが。
果たして、私の読みは当たっていた。

「そうだよ、ここの家の裏っかわに公園があるでしょ。そこに居たんだ。お互い相手が幽霊だって分かってたから、なんとなく気になってた。んで、付き合い始めたの」
「なんか色々端折ってない？」
「……幽霊だけの世界で姉ちゃんが生身の異性を見つけたら、色々端折って付き合うんじゃないの？」
あぁ、もしかしたらそうかも、なんて思ってしまうあたり、やっぱり弟か。私がどんな考えに納得するのかっていう感性がわかってる。
何度か試し投げをしていた悠紀が納得したように一つ頷く。
「じゃあ、次、やろう。そろそろ勝たせてもらうよ」
かわいいはずの弟が不敵に笑った。

3ゲーム目は、圧倒的勝利だった。しかも悠紀の。
2つ言い訳をしていいのなら、ユーキがなぜか急に調子を上げていた事が敗因の一つ。そしてもう一つは、ユーキの例え話が気になって集中できなかった事がもう一つだ。
やっぱり、ユーキは、生き辛いんだろうか。
そりゃそうだろう。自分の中の一人が声を上げる。もし私がいきなり幽霊としてよみがえって蒼の所で暮らしてたら……って、なんでそこで蒼が！
ユーキの発言に釣られてるな……そんな事を考えながら注意力が散漫になっていると、気付いたら負けていた。
ユーキの質問は「神城さんとはいつから付き合ってるの？」だった。
「や、いつからっていうか……付き合ってないしね？」
「そういうガキみたいな誤魔化しはいいから……姉ちゃんが大学行ってた時からってことは、俺が生きてた頃には？」

「……ううん、ユーキが死んじゃう前に付き合ってた人とは、別れた。で、その後かな、アイツと会ったのは」
「あぁ、そういえば、あの頃の姉ちゃんはペアリングとかつけてたねぇ。蒼さんとはそういうの付けないの」
よく覚えてるな、コイツ。つーか、
「質問は一つでしょ。さっさと次いくよー」

敗因。落ち着く前に再開したこと。
「あれはねー。道和が私に我慢させなかったっていうか、服とかバッグはいらないけど、私がそういうずっと身につけられるの欲しがってるの知ってたというか……」
「その人とは何で別れたん」
「同棲するには良かったんだけど、どーにもデートとかに向かない相手というか、小洒落た事が出来ないというか……”彼氏”には向いてないタイプだったんだよ。大学生じゃなくて、数年後に会ってたら、そのまま結婚してたかも」
私の口から結婚という言葉が出て、ユーキが驚いた顔をする。
最近忘れてるけど、ユーキが死んだのは高校の卒業式の日だ。高校生は結婚とか考えないよね……大学生、ひいては社会人になると、女子は結構真剣に捉え始めたりするんだけど、男子高校生だもんなぁ。
弟のちょっと可愛い反応をみたりして和んだので、軽くダーツを投げる。
狙い通り、ドンのピシャリで中心に刺さる。
「じゃ、続けようか」

頭の中がスッキリして、ふと思う。ユーキはなんでこんなにも蒼の事を気にするんだろう。
（やっぱり自分が消えた後の事が心配なのかな……）
でもそんなの余計なお世話だよね。ユーキがいなくなってから4

年間。私なりにちゃんとやって来たんだし。それを言うならお前が勝手に死んじゃった方が私を不安にさせたっての。
とはいえ、死人に鞭打つような事を言うほど、私も鬼じゃない。
「安心しなよ。私たちはちゃんと血のつながった姉弟でしょ。心配しなくても、私が捕まえる男はきっと、あんただって気に入る男よ」
「……何だって？」
「いや、まぁね。蒼とは限らないけど、多分道和とかもあんたは嫌いじゃないだろうし。別にどっちがってわけでもないんだけど……あぁもう！とにかく続けるわよ！」
何ビックリしてるのよ。いきなり旦那候補が気にいるとかどうのって話をしたら弟でなくても驚く、かな？驚かないのはお母さんくらいか。
そんなに大した事を言ったつもりはないんだけど、どうにもユーキをかなり心理的に揺さぶったようで、続くゲームのスコアは散々だった。
波乱もなく私が勝つ。
ユーキもやる気を失っていたし、改めて考える。
そして私が思いついたのは、質問じゃなかった。
だから、私はユーキにお願いした。
「彼女に合わせて。聞いてみたいこと、あるんだ」

All of Reasons ― 03

マンションの裏手にある公園を訪れたのは、実は初めてだった。マンションの表から出て、大きく回って行かなければたどり着けない位置にあるから、駅と家の間しか移動しない私には馴染みがない。逆にユーキは買い物に行く時、駅とは反対の方角にある安いスーパーに行っているらしく、ここを頻繁に通るそうだ。私はいつも駅からの通り道にあるお店で済ませちゃうからなぁ。

もちろん公園があることは知っていたが、私にとっては休日に子供たちが遊んでいる声が聞こえる程度の認識でしかなかった。その日ももちろん子供たちが多く遊んでいて、その親達が一箇所にまとまって談笑していた。

そしてその輪に入らず、ひとり端っこのベンチに座っている女性がいた。

「桃依（ももえ）さん」

弟が駆けていく。この人が、そうなのか。

「あら、悠紀くん。今日はお姉さんも連れてきてくれたのね」

「うん、まぁ成行きなんだけど、姉さんが会いたいっていうからさ」

弟の彼女を見るのは初めてじゃない。

だけど、何故か桃依さんを紹介するときのユーキはとてつもなく照れていた。

「えーと、この人が水島桃依さん。職業幽霊、勤務地はココ」

「ユーキ、ちょっとつまらないから黙って」

「んー、私も今のは減点かなぁ」

二人揃ってダメだしする。ユーキと付き合っててても、下らない言い回しをする所はダメなんだ。

「あ……そっすか……」

あからさまにへこむユーキが面白くて、水島さんと笑いあう。

綺麗な人だ、と思った。

ちょっと服装は古い気もする。かなり質素なワンピースを着ているが、それがしっくりくる雰囲気が彼女にはあった。ユーキは私と同い年だと言っていたけど……

（もしかしたら、結構年上？）

そう思って背筋を伸ばし、挨拶する。

「初めまして、ユーキの姉の茜です」

「こちらこそ、悠紀君とお付き合いさせていただいてます。水島です」

よろしく、と差し出された手を恐る恐る握り返す。

どうやらこの人もユーキと同じで、体があるようだった。

私が不思議そうな顔をして二度三度にぎにぎしていたからか、水島さんもくすぐったがって手を引いてしまう。

「あ、あのっ、すいませっ」

「いいのよ。幽霊が体を持ってるなんて、私も自分が死ぬまで思わなかったもの」

水島さんの表情は、とても柔らかくて優しかった。

蒼の言い方を借りれば、彼女も死ぬときに強い思いがあったはずで、そんなものに囚われているようには見えなかった。

「何か、聞きたいことがあるのかしら？」

「あるにはあるんですが……」

聞きづらい。こんな質問生きている人間にはしないから、幽霊さんの機嫌を損ねてしまうかどうかもわからない。

そんな迷いが伝わったのかどうか分からないが、水島さんはユーキを手招きすると、何かを囁いた。それに頷いたユーキも走ってどこかに行ってしまう。

「あの……？」

「ユーキくんにはちょっとお買い物に行ってもらったわ。男の子がいると、出来ない話もあるでしょ？」

だから、なんでも聞いてくれていいわよ。

彼女の声を聞くと、不思議な事に本当に気兼ねが無くなってしま

う。幽霊になってもこれだけの人格者なら、ユーキが付き合ってても不満など覚えようがない。
だからというわけでもないけど、私は聞きたいことを聞くことにした。
「2つ、聞きたいことがあります。水島さんは、自分が亡くなった時の事を覚えていますか。それと、自分がどうしたら成仏できるのか、とか、分かってたりしますか？」
私の質問に嫌な顔もせず、そうだと思ったわ、と微笑んでくれる。
水島さんは長くなるから座って、とベンチの隣を軽く手で払ってくれる。
あまりそういう事を気にしない私はそのまま座った。スカートじゃなくて良かった。
彼女はどこか懐かしそうな表情で子供達と母親を眺めたまま黙っていた。しばらくして、5時の時報が鳴り、彼らは公園から去っていった。
先ほどまでの賑やかさが嘘のように静まる。表通りからも離れているから、まるでこの辺り一帯の音がここに吸い込まれているような錯覚を覚える。
周りの音が全て無くなってしまったんじゃないかと思いはじめた頃、彼女はゆっくりを言葉を吐き出し始めた。
「私にはね、夫も子供も居たの。だけど、夫は他の女のところに言っちゃったわ。私は頑張って娘を育てたけど、何ででしょうね。生きるのに疲れて、死んじゃった。自殺だったのに自然死みたいに言うのはおかしいけれど、特に強い恨みも何も持たずに死んだわ。ちょっと薄気味悪いでしょうけど、あなたの住んでいるマンション、あそこの非常階段からここに飛び降りて、ね。
最初は自分がなんで幽霊になったのか分からなかったの。この公園から出られない事に気づいて、それでも他の霊と出会ったり、考えたりしてすごしてた。しばらくして夫とこの公園で再会して……夫は自分も幽霊になって一緒にいようなんて馬鹿な事を言っていた

けれど、結局そのまま死んじゃったわね。
で、その時になってようやく思い当たったの。というより思い出した、かな。私が死ぬとき、最後に何を思ったのか。
私は娘の事が心残りなの。ここのすぐ近くに私の実家があってね。だからいつか娘をふと見ることが出来るんじゃないかって思ってる。そして多分、それを見ることができたなら、私は満足できると思うわ」
水島さんのさっきまでのイメージとはかけ離れた、何かがその言葉には篭っていた。そしてそれを内から出すのに、彼女はとても力を使っているように見えた。あるいは、無秩序に吐き出さないために、かもしれない。
けど、最後に彼女が呟いた一言が耳を離れなかった。
「勝手にいなくなったのに、ひどいママよね」
水島さんは、きっと娘をひとり残してしまった事を後悔してる。この人の悲しそうな微笑みを、私はそう感じた。
「この公園から出られないのって、何でですか？」
「どうしてかは分からないけど、何故かは分かるわ。私が地縛霊だからよ。夫がこの公園の前でトラックに飛び込む前は、まだ近くまで出歩けたんだけど……今となっては公園の入り口にあるコンクリートの境目すら越えられないわ」
残念な旦那さんですねぇ。私がそういうと彼女もほんとよねぇ、と返してくる。
実に申し訳ないが、全く役に立ててない。甲斐性どころの問題じゃなくダメな旦那さんだったんだ。
それでも、子供を作ろう、育てようと思うには値する男性だったのだろう。
私はふと気になったことを聞いてみた。
「その人は、ユーキに似てるんですか？」
将来ユーキがそんな風になったらやだなぁ。というのは口には出さず。

「悠紀くんは、似てないなぁ。すごい真面目な人だったから。真面目すぎて、女性の躱し方が分からないような人だった。そんな人を落としたんだもん、私以外の人がそうやってあの人を落とすことも考えられないわけじゃんかったのにねぇ。やっぱり恋は盲目なのね」
大人びている彼女が見せる照れた顔は、とても魅力的だった。それと、ユーキの事を大切にして、ちゃんと考えてくれているのも伝わった。だって、水島さんが見つめる先には、ユーキがいた。多分、水島さんはユーキがどこにいても、ちゃんとこいつを見つけてくれる。
「何の話をしてたの」
ユーキがためらわずに水島さんの横に座る。
「私が地縛霊って事とか、いろいろ聞いてもらってたの」
「あぁ、それかぁ。でも俺も桃依さんがこの公園の地縛霊で良かったと思うよ」
「何でそう思うのよユーキ。地縛霊じゃなければ水島さんは自由に出歩けるのよ。そうすれば娘さんも見れるかもしれないじゃない」
「だってさ、もし飛び降りた元の場所で地縛霊になっちゃったらどうよ。桃依さん、ずっと非常階段のあの踊り場に居ることになっちゃうんだぜ？」
寒いだろうし……つーかあんなところに居たら落ちちゃいそうでうかうか寝てられないだろーなー。
ブツブツと呟きながら真剣に嫌そうな顔をするおバカな弟。
「ほんと、こんなののどこが良いんですか？」
「さぁ、どこかしらねぇ。やっぱり、恋は盲目なんじゃないかしら」
この人、それを言いたいだけではなかろうか。
そろそろ戻ろうかと立ち上がった私に、水島さんはそっと耳打ちしてきた。
ユーキと部屋に戻る。

裏の公園は、私の部屋からは見えない位置にある。公園からの声は聞こえるが……。
最後に水島さんが教えてくれたこと。
それは、成仏以外に幽霊が消えてしまうことについてだ。
「幽霊はね、エネルギーの塊なの。だから、エネルギーを縛る想いがなくなる以外にも、エネルギー自体が切れて消滅してしまう事もあるの」
彼女がそれで私に何を思わせたかったのか。それは分からない。
私は生身の人間だ。ユーキがいなくなった辛さを想像（経験もしているが）することしか出来ない。
「ユーキはどうしたら成仏しちゃうの」
だから、私は素直に聞くことにした。私が分からなければ、分かるのはユーキだけだ。
返事はなかなか返って来なかった。前にもユーキは、なぜ自分が霊になったのか、なんで実家じゃなくて私の前に現れたのか、わからないと言っていた。
けど、再開してから一ヶ月。何も考えていないというわけでもないはずだ。私の弟は変なところがぬけているが、ぼんやりだらだら生きる人間でもない。
しばらく迷ったユーキは、私の顔をじっと見てから目を逸らした。
「ごめん、分からない」
それが嘘だということはわかった。
だけど、私が問い詰めるより先に、ユーキの言葉が続いた。
「でも、気になってることはある」
「そう……」
どーも、口調からすると、それをこのまま放っておくつもりもないみたいだ。
私は、ユーキのお姉さんとして、今ココで何を言うべきだろう。
だらしなく甘えたり、泣いて引きとめたり、そういうのは違うな、と思った。

「ずっと傍にいてほしいけど、私にもいずれ夫が出来て、母親になるかもしれない。そしたら、ずっとユーキと一緒には、いられないよね。だから、もしあなたが成仏したいなら、私は協力するよ」
ユーキが目線を私に戻すまで、待った。
少し迷ったような表情はそのままだったけれど、一度大きく頷いて、
「ありがと、姉ちゃん」
朗らかに笑った。その笑顔は、ちょっと水島さんに似てると思った。
「じゃ、ちょっとお金貸してくれない？ちょっと旅行に行ってくるから」

how you remind me — 01

ユーキは行き先も告げずに、ふらっと家を出ていった。いや、この表現じゃまるで家出とか私が追い出したようなんだけども、彼は宣言通りに旅行に行ったようだった。

当然、焦った。ユーキは根拠も何もなく、「確かめなくちゃいけない事があるから」としか言わないのに、意見を曲げなかった。

「姉ちゃんを一人で残すのがこんなにも心配だって分かったからね。絶対、帰ってくるよ」

弟（しかも高校生の）にこんな情けない事を言われてしまって、引き止めることなんて出来なかった。

ユーキが帰ってきてから一ヶ月。

窓の外では夏の終わりを嘆くように、夜でもセミが煩かったというのに、私はあまりに寂しくて少女のようにぬいぐるみを抱かなければ眠りにつけなかった。

だというのに、話はユーキが帰ってきてハッピーエンド、とは行かなかった。

ユーキがどこかに出かけ、久しぶりに一人で夜を明かした次の日。道和に誘われた食事で、私はとんでもない事を聞かされる事になる。

「寄りを戻さないか」

むせた。食後にワインを口につけたタイミングで切りだしてきたのは、最悪だと思う。

「……なに？」

「だから、寄りを戻さないか」

戻してくれないか、ではなく、戻さないか、という対等でいよう

とするスタンスは大いに結構。混乱して心の口調がおかしな事になっているが、えーと、まず言うことがあるはずだ。
「別れたからには、別れたなりの原因があると思うんだけど……どうしていきなり？」
「本当にいきなりだと思ってるわけじゃないよね。別れた女性を何度も食事に誘って、その後もご一緒しようなんて下心がないとやらないだろう」
「私たちの間で、彼氏彼女は長持ちしないって結論に、お互い達したと思ってたの。だから一緒にいられたんじゃない」
卑怯な言い方だ。分かって言っている。
今じゃもう、付き合ってない状態での付き合いのほうが長いくらいだ。確かに、彼にその気を全く感じなかったわけじゃなかったから、これはそんな状態を続けてしまった私の非でもあるんだ。
だけど、これは言い訳なんだけど、そういう関係だから続くような相手も居てしまうわけで、私にとって彼はまさにソレだったりするわけで。
彼氏彼女という環境に甘えてベタベタしては長持ちしない。だけど友達というほどあっさりしたものよりは近くに居てもいい存在。そしてお互いにそう望まないと決定的に崩れてしまう距離感。それを保ってくれると信じていたから、だから私の卑怯さは卑屈で引っ込んでしまうには十分な嫌味を持っていた。
これで彼と決定的に離れてしまっても、うかつに近寄ってお互い火傷をするよりはマシだ。逃げるように避けるように、とっさにそんな言葉を返してしまった私を、だけど彼は諦めなかった。
「うん、だから結婚しないか」
「あ、あぁ、、けっこん！？」
舌が回らなくなった。
焦って顔が真っ赤になるのが分かる。だっつーのに、なんで道和は落ち着いて次のグラスなんて頼んでるの！
「ベタベタと学生気分でくっついていたのを、君も僕と同じで『失

敗だった』と思ってくれてるだろう。僕の中での君は恋愛を楽しむ彼女というより、生活を共にする相手なんだけど……どうかな」
「い、いやいやいや、私まだ社会人2年目だよ！？早いよ！？」
「仕事をやめろというわけではないよ。というか24歳なら特別早いわけでもないんじゃないかな。5年後もまだ早いって言えるなら、5年でも待つけど」
「あぁうん、その憎まれ口でちょっと落ち着けた。でもさ、えぇと」
「今すぐ答えなくてもいい。だけど、そのつもりで僕と過ごしてもらえないかな」
正直な感想を言えば、そんなことを考える余裕はない、だった。
私の将来は確かにあやふやだ。周りの女の子は結婚したいだのそれを理由に仕事を辞めたいだの、いろいろ言っているけれど、どうもその手の将来図を私はうまく描けない。
相手が誰かはさておいて、私が誰かの妻になることは考えられなくもないけれど、母になることは考えられない。
これは私が若いからなんだろうか……？
「……ごめん」
彼へのその場での返事は、謝罪になってしまった。

見送りは駅までにしてもらって、家には一人で帰った。
もちろん、ユーキは帰ってきていなくて、そう言えば再開してからユーキが家に居なかった夜は初めてだった。蒼の家に泊まった時は、まぁ別だろう。あっちから会いに来たし。
ユーキの事を考えるのは、道和から言われたことから意識を遠ざけるのにピッタリだ。そして、そんな事を考えている自分に気づくと、もうユーキの事だけにかかずらってもいられない。
「そっか、私からユーキに会いに行く事は、出来ないんだ……」
蒼に助けてもらったあの日。ユーキが私のことを分かったのは「なんとなく」だと後で聞いたけれど、ユーキには私の事が分かるら

しい。それはもちろんあいつが幽霊になってからの事で、それがもしかしたら私の所にユーキが来た原因の一つなのかもしれない。
「ユーキだったら、私が何を気にしてるのか、分かるのかな……」
まさしく今回みたいな意味で、彼のことも悪くないと考えたこともあったのに、何かが気になって、それが分からないことが更に気持ち悪さを増長させる。
（あぁ、なんでだろう。わかんないや。わかんないけど……）
まとわりつく嫌悪感が、ただひたすらに怖かった。
私は何が気に入らないの。

逢いたいよ……。

誰に向ける事も出来ない言葉を唱え続けて、眠れぬまま、夜を過ごした。

how you remind me ― 02

ケータイの着信音で、目が覚めた。番号は非通知だったけれど迷わず出る。電話口から聞こえてくる声は、間違いなくやっぱりユーキだ。

「おはよう。寝てた？」

「・・・おきた」

口の中がもちゃっとしてて、上手く言葉にならなかった。時計を確認すると、今は月曜日の朝６時。普通ならもう少し寝てから、支度をして出社するけれど、今の私にとって会社なんて、全く、これっぽっちも気にかからなかった。

「今、どこにいるの。いつ帰って来る？」

ユーキに会いたかった。帰って来るのが昼になるのなら、会社を休んで待ちたい。ユーキが何を確かめに言ったのか、何を得たのか知りたい。……知って、私がどうしたいかは全く考えてないけれど。

ユーキがこの前の話から成仏したいと思ったとして、本当にユーキが成仏するのを手助けできるだろうか。弟が一晩いなくなっただけでこんなに不安になってしまうんじゃ、もう会えなくなることがどれだけ辛いか。身をもって知ってしまっては、格好をつける事もままならない。いつか道和と映画を見たときの会話を思い出す。あんなに潔い生き方は、出来ない。ヒーローより、物語序盤で無様に死に様を見せる一般人が私にはお似合いだ。

しばらく沈黙が続く。ユーキは迷ったように黙り込んでいて、私もそれ以上の事は直接聞きたかったから。

「実は……帰るだけのお金がなくなっちゃって……迎えに来てほしいんだ」

「はぁ！？使い切ったの！？どこまでいってるのよ、普通に移動するだけなら地球の裏側まで行けるのよ！？」

おっきい声を出して、眠気も気だるげなココロモチも吹っ飛んだ。

「ごめんなさい。とりあえずＸＸＸ県の……」
声からして、本当に謝る気はなさそうだ。ユーキは住所を教えるだけ教えて、電話を切った。こういう時に謝れなかったり、申し訳なく思えないような性格じゃない。おそらく、方便。私を連れ出すための。
ユーキの現在地は、ウェブで検索してみると太平洋側から日本海側に抜ける山の中の一部らしい。
こんな所に呼び出して、何があるんだろう。疑問は出てきても、既にこちらからユーキに対してアクセスする手段はないわけだ。
「安い携帯でも持たせれば良かった……」
今更ながらに後悔するが、迷っている時間はなかった。
地図で見ると、新幹線どころか鉄道も通ってない田舎だ。多分、鉄道を乗り継いで最後はバスになるはず。
都合３日ほどを休むための言い訳をこしらえてから、支度を始める。新幹線に乗る頃には、会社に電話するにも丁度いい時間になっているはずだ。ふだん人に仕事を丸投げして定時に帰る上司に、心の中で舌を出す。
不安や疑問がないわけじゃない。だけど、ユーキが見つけた答えが何か知りたくて、ちょっとだけ、ワクワクした。

『まもなくー、大田ー。大田に停車します。お降りの方は――』
車内にアナウンスの声がやたら大きく響く。
それもそのはずだ。バスの中には私以外に数人のお爺ちゃんとお婆ちゃんが乗っているだけだが、どの人も耳が遠そうだ。その上、舗装がはがれまくった道路をガタのきたバスで走っているので音はうるさいわ跳ねるわで大変だった。少しお尻が痛い。服装が都会っぽくて浮いている事もあって、道行く学生達がちらちらと見てくるのもむずがゆい。
（私も、地元に戻ってくる大学生のお姉さんが凄く大人に見えたな

ー）

その当時の事を思い出すと、なんとも言えない気持ちになる。都会では地味な服装なのに、田舎では浮いてしまうぐらい派手に見られる。私は大学生の間、一度も帰省しなかったけど、地味だった私でも注目を集める事はできただろうか。

窓の横についている昔ながらのボタンを押して、バス中のボタンがいっせいに灯る。

バスから降りたら、目の前に広がる雄大な景色を楽しめばいい……わけがない。

目前に広がる田畑。斜面に植えられた木々と、お茶畑と、よくそんな所に立てたな、と言いたくなるような家々。

まったく、この光景に見覚えがない。

「で、こっからどこに行けばいいのよ……さっさと連絡しなさいよね、ばか」

小声でブツブツと文句を言っていると、携帯が鳴る。

「さ、言われた通りの停留所で降りたわよ。今どこにいるの」

「そこから、大きなお寺見える？そう、田んぼの奥のほう。そこのお寺から山を登ったとこにある公園にいる」

「山？登るの！？」

「登るよ」

「先に言いなさいよ！山に登れるカッコウじゃないんだからね！」

「大丈夫だよ。そこらのおじいちゃん達が散歩にくるようなとこだし、若い姉ちゃんなら１０分くらいで登れる所だから。待ってるよ」

ほんとに、一言多い。しかも詳しい事は着くまで言わないつもりらしい。嘆息しながら通話を切ろうと耳から話したところで、ユーキの声が聞こえて慌てて戻す。

「そこね、今は合併しちゃって、掛山市って言うんだけど」

昔は、大西町、って名前だったんだ。

「だいせいちょう……大浜公園にいるの？」

自然に名前が出た。おおはまこうえん。私が口にした言葉に、ユ

ーキはうんともすんとも言わない。
「じゃ、待ってる」
通話が切れても、私はしばらく固まったままだった。
叫びだしたいような気持ち悪さと、泣きたくなる位もとめてやまないものが、胸の中に同居してる。
「私、知ってるんだ……」
どうして思い出せないのかは分からないけれど、一つの名前がきっかけで、私はいろんな事を思い出していた。迷わずに目的地の公園に向かって歩き始める。道の途中にあるもの一つ一つが懐かしさに溢れている。潰れた駄菓子屋を見て悲しい気持ちになれば、昔からある小さな社を見て「あそこで遊んだな」という事も思い出せる。けれど、その記憶の中にユーキの姿は無かった。
思い出しさえすれば、公園までの距離は気後れする事なんてまったくなくて、むしろ景色を楽しむには短すぎるくらいだった。ゆれる金の稲穂、紅葉に染まる山、そこらの池の生垣から顔を出している秋の木々。多分、私がココに来ていたのは凄く子供の頃なんだろう。高校生くらいのときにこんないい土地に来ていたら、忘れるはずが無い。
そう、そもそも忘れるはずが無い事を私は覚えていない。それがとても怖い。自分が忘れていることも、忘れるほどの事があったにもかかわらず、思い出せないのはもっと怖い。今ここで、1人でその事を考えてしまったら、きっと足が止まってそこから動けなくなる。
だから、何も考えず、ユーキの事を信じて歩き続けた。
そして――。

「ユーキ……」
山頂にたどり着くと、そこには山のように舞う赤や黄の葉と、一際高い展望台の上に待つユーキがいた。

「お疲れ様、姉ちゃん。こんなとこまで呼び出してごめん……でも、ちょっとは思い出せたよね」
私が一歩ずつ踏みしめて展望台を登る間、ユーキの言葉には返事をしなかった。そして、やっぱりそうなんだ、と思う。
ユーキは、私が忘れた事を知っている。その辺全部を知って、私を待っていたんだ。
嫌な予感を感じざるを得ない。あぁ、これじゃまるで……。それでも足は止められない。最上階に顔を出すと、そこには絶景…そうとしか表現できない景色が広がっていた。
紅葉に染まる山の上から、下界に広がる金色の大地を見下ろす。覚えていないのに、どこが懐かしかった。この景色を見て心が軽くなるのを計算していたなら、ユーキを褒めたいところだ。
胸につかえたナニカが一瞬消えて、自然に笑うことが出来た。
「……うん、知ってるよ。私はここに来た事があるはず」
「そうだね。僕は初めてだけど、姉ちゃんはここに来た事があるはずだ」
ユーキの隣に立って、横顔を眺める。こんな景色の中にいるのに、ユーキは苦しいのを堪えるように無表情だった。
「ごめん、ユーキ。私は全然、覚えてない」
こんな情けないお姉ちゃんでごめん。だけど、
「だけど、教えて。私が何を、忘れたのか」
大丈夫だよ。どんなに辛くても、ちゃんとユーキの言葉を受け入れるから。強く握った手から、たぶん思いは伝わった。冷たくて堅かったユーキの手がだんだんとあったまっていく。
とてもとても長い沈黙、だけど本当は一瞬。そんなありふれた緊張が私達を包んで、ほぐれる。
じっと見つめてくるユーキの顔に、恐れやためらいは残っていなかった。
「俺と姉ちゃんは、血が繋がってないんだ。俺たちは母さんの子供

だけど……父親は違うんだよ」

how you remind me — 03

「俺と姉ちゃんは、母さんは同じなんだ。だけど、父親は違う」
ユーキは声をあらげもせず、淡々と話し始める。
「姉ちゃんが実の父親だと思っているのは俺の親父。お袋は姉ちゃんを連れたまま親父と再婚して、俺を産んだんだよ。
それを母さんが教えてくれたのは親父がガンで入院した時だったな。それは覚えてる？」
私は軽く頷いた。その時の私は中学1年で、ユーキは小学5年だった。
だけど、思い出せるのは”父さんが入院した”という事実だけで……母さんが教えてくれたというくだりは、まったく思い出せない。記憶の中に、父さんを見舞いに行ったときの景色はのこっていることが更に私を混乱させる。
「今でも母さんの判断が良かったのは分からないけど。その時に姉ちゃんの父親の事を、お袋が俺たちに説明したんだよ」
「子供だから知らせてなかった」を理由にしないために、母さんは私達にその事を話したらしい。どちらかと言えば、私のために。
その潔さは実に母さんらしい判断だと思う。貴女の本当のお父さんじゃないけど、思ってあげて欲しい。母は私にそう言ったらしい。
ユーキは私の反応を待って、じっと見つめてくる。視線に耐え切れず、思わず顔を伏せてしまう。
正直な事を言うと、一瞬だけ、ユーキが私を騙そうとしてるんじゃないかと考えた。
けどユーキがこんなところまで来て、私にそんな嘘を伝えるだろうか。そんなバカな事ってない。だって、今の話が本当にしろ、嘘にしろ、ユーキは私の弟なんだ。生まれてから死ぬまで消えない繋がりを信じられなくなったら、何を信じて生きていけるだろう。
風が吹いて背筋を撫でる。顔を上げると、ユーキは初めて迷うよ

うな素振りを見せていた。
よしっと気合（？）を入れなおすと、視界を塞ぐように私を抱きしめて胸に押し付ける。
「ちょ、何！？」
「その時も、こうしてたんだよ。母さんが大事な話があるっていうのに、無理やり俺たちを布団の中に押しこんでさ」
下らない冗談しか言えない弟のくせに、こういう時は本当に冴えているから困る。
ユーキの言葉が、視界を塞がれた私の記憶を優しく浮かび上がらせる。
布団にユーキと二人で押し込められて、その中で母親に話を聞かされた。何を聞かされるんだろうと暗闇の中で、ろくに見えないお互いの顔を不安気に見つめ合っていた。
聞かされる色んなこと。感情を混ぜずに、母さんが伝えてくれた色んなこと。
父さんの病状、本当の父親のこと、助かる見込み、どうして別れたのか、今の父さんに会えなくなるかも知れない。
そして、最後に母さんが言った言葉が、はっきりと思い出せた。
「思いっきり、泣きなさい」
ユーキの体を引き剥がして、さっきまでと同じように、ユーキの正面に立つ。
弟は、嬉しそうに笑っていた。
「思いっきり、泣きなさい。ユーキ（俺）と分け合いなさい。父さんは繋がってなくても、ユーキ（俺）と私（姉ちゃん）はちゃんと繋がってるんだから」
2人でそっくりそのまま繰り返した、その言葉。
泣き虫だったのに無理をして堪えていた私を突き崩したその言葉。
ユーキが、私の肩にかけた手をそっと離す。
「思い出せた？親父の事を教えてもらった時の事。姉ちゃんの本当の父さんのこと。それと……俺が死んだ時の事も」
さっきまで、思い出せなかったのがウソのように、色んな事が分

かる。
今まで経験した事のない感覚が気持ち悪い。思い出せる記憶も信じられないし、それを忘れて生きてきたさっきまでの私も気持ち悪い。だって、あんなに大事な事を忘れていたんだもの。
だけど、ユーキのくれた言葉が、母さんの残してくれた言葉が、私の記憶が真実なんだと信じさせてくれる。
「ごめん、全部忘れてて。……ユーキの卒業式の日の事も、全部思い出せたよ」
ユーキは、高校を卒業したその日に、逝った。
その事実だけが私の中に有って、その言葉以外に残っているものはなかった。
無責任な記憶だけで喋っていた自分の態度を思いかえすと、恥ずかしくなる。だって、私はもう、思い出せてしまうから。
「ユーキは……私をかばって……私の本当の父親に刺されて、死んだんだね」
自分をかばって死んだ弟に直接こんなことを聞いているという状況に、どんな顔をすればいいのか分からなくなる。だけど、ユーキの表情はぜんぜん変わらなかった。辛い顔も悲しい顔もしないで、どうという事はない風をふかせながら、思い出してくれてありがとう、なんて格好つけたことを言う余裕があるらしい。
ゆっくりと、私を落ち着けるように、一つ一つ確認しながらユーキが話し始める。
「姉ちゃんの父親は、生活能力がない人だったらしい。それが理由でお袋は離婚して、親父と再婚した。
姉ちゃんは俺が死ぬちょっと前あたりから、ストーキングされてたんだよ。それを相談されてたのは、俺だけだった。何もしなかったのは今でもまずかったと思う。
俺の卒業式の日、仕事でこれなかったお袋達の代わりに参列した姉ちゃんを見つけて、アイツは俺たちの前に出てきたんだ。ストーカーの正体がアイツだって分かったのはその時だ」

「私を連れ去ろうとしたあの人に抵抗して、ナイフを出されて、ユーキは私をかばって刺された」
「そうだよ。俺は幽霊になったけど、自分が死ぬときの事はちゃんと覚えてる」
ユーキが左胸の下辺りを軽くさする。
「なあ、姉ちゃん。こんな事を言うのは生意気で、俺の知ってる姉ちゃんより4つも年食った大人に言うのも恥ずかしいんだけど……俺は死ぬときに、姉ちゃんの事が心配だったんだ。アイツは俺を刺してそのまま逃げ出して、姉ちゃんは動転してて。だから俺は姉ちゃんに取り憑いちゃったんだと思う。それが何で出てきたのかは分からないけど、だから俺は姉ちゃんの所にこれたんだよ」
ユーキが私の部屋の前で待っていたのを思い出す。なんで実家から離れた私のところにきたのか分からなかったけど、なんとなく分かった。ユーキは私の目の前でも、部屋の中でもなく、私の家のドアの前で待っていてくれたんだから。
「ありがとう、ユーキ」
それはユーキが意図してやったことじゃないかもしれない。私の勘違いかもしれない。だけど、ユーキはもどってきてから今日までの短い間だったけど、私のために色んなことをしてくれた。自分でも気付かなかったけど、いびつな心のままで生活して、私は多分とても疲れてた。それを癒してくれていたのは填島さんだったり、蒼だったりしたけれど、それでもどうしようもないぐらい傷が深くなって、そこからユーキが出てきたんじゃないかな。
本当に、なんてよく出来た弟だろう。誰にだって自慢できる弟だ。
だから、今。私の目の前でユーキがどんどん透けていっても、私は泣いちゃいけないんだと思う。
ユーキの手に自分の手を重ねて、彼の傷跡をなぞる。
「思い出してくれてありがとう、姉ちゃん。たまには家に帰ってあげてよ。どうせ俺が死んでから帰れてないんでしょ」
「あはは、ほんっと余計な事ばっかり分かるんだね」

体が薄くなっているのは、自分でも感じてるだろうに、最後まで私のことばっかりだ。
「……ねえ、ユーキ。他にもっと言うことはないの？私のせいばっかりで、ユーキが消えちゃうなんて、そんなのイヤ」
「そうかな。俺は好きなことばかりやってたよ。姉ちゃんに黙って良い物買って来たおかげで、幽霊になってもおいしいものも食べられたし、神城さんとも遊んだりナンパに行ったりして楽しかったし、彼女もできたし、姉ちゃんも全部ちゃんと思い出してくれた。何より、俺が短い時間でもこの世界で生き直せたのがスゴイ事なんだ。これ以上は、俺には要らないよ。だから姉ちゃんに俺から最後のお知らせだ」
ユーキは私の顔をあげさせて、ピースをする。二つって意味だ。
「ここが、姉ちゃんの父親の実家がある町だってのは、思い出したよね。俺はここのふもとにある、そこに行ってきたんだ」
「一人で！？」
「まぁね。でも安心して、姉ちゃん。姉ちゃんの父親は、もう居ないんだ。俺を殺した犯人は事件としては見つかってないままだっていうのは、桃依さんと二人で会う前から分かってたんだ。だから、姉ちゃんがもう危なくないかココに来て確かめたんだよ」
「なんで、一人で全部やっちゃうの！もし、また危ない目にあったらどうしたのよ！？」
思い出さなかったかもしれないけど、私に話してくれても良かったのに。
私が焦っているのに、ユーキは余裕たっぷりに変な笑い方をした。そして指を一本おる。
「幽霊だから、死なないんじゃないかな。それに、1人じゃなかった。保険はうっといたから、大丈夫だよ」
「……それが、最後なの？」
「うん」
ユーキの体はもう、ほとんど向こうが透けて見えるくらいに薄く

なっていた。
集中しないと、笑顔すらわからない。
「あとは俺が残した色んなことを、姉ちゃんが忘れないでくれれば大丈夫だよ。俺は向こうで姉ちゃんと桃依さんを待ってる」
ユーキが一歩後ろに下がる。手すりの向こうに通り抜けたユーキが背を向ける。
「ユーキっ！」
一瞬立ち止まってくれた弟に、私があげられる言葉は、一つだけ。
「いままで、ありがとう」
「俺、姉ちゃんの弟で良かったよ」
最後まで振り返らずに、一歩を踏み出す。
私のためにたくさんを残してくれた弟。あなたの命を奪ってしまった私の事を、本当に思ってくれたユーキ。
一瞬のまばたきの中に、ユーキの姿が溶けて消えた。
胸の中にあった何かが、去っていく。ユーキの死から四年。私は初めて、弟を亡くしたんだ。
最後に一言だけユーキの声が聞こえた気がした。
「うん、またね」
私の返事も、聞こえているだろうか。顔を下げずに展望台を降りる。
一歩を踏み出すたびに、ユーキと離れていく気がする。
多分ユーキは、きっと飛んでもないスピードで物凄く高いところか、逆にとんでもなく深い所まで行っているはずだ。もしかしたら、宗教観しだいではこの瞬間に別の命になっているかもしれない。
でも、今はもうそれは大したこと無いんだと思った。たとえ何かがアタリだったり全てがハズレだったりしても、私はもう大丈夫だ。
ユーキが残してってくれた私がいる。私がいるって事が、ユーキが居てくれたってことになるんだから。
だから、ユーキが私の思い出以外に残していったもう一つの贈り物に、私は今までで一番の笑顔を送れたと思う。

「頑張ったね、茜」
「ありがとう、蒼」

someday

「ごめんなさい」
ユーキを見送った翌日。私は填島さんを呼び出して、彼からの求婚を、私は断った。
「それと、もう会わない。嫌いになったわけじゃないけど、好きでもないのに会っていい相手じゃないと思うから」
本当に今更だと思う。これで填島さんが怒っても仕方ないだろう。私達はお互いに良くないと思いつつ、離れられない惰性で付き合いを続けてきたんだから。
予想に反して、彼は全く怒らなかった。それどころか、
「断られたときの答えを、せっかく考えてきたっていうのに、君が言うなよな。格好がつかないだろう」
と茶化す始末だ。全く持って失礼な話だが、填島さんにとっても「煮え切らない関係を打ち切るためのやけっぱち」に近いものだったらしい。
もっとドロドロになるかと思っていたのに、さっぱりと引かれてしまって気が抜けてしまった。
最後に言う言葉は「ごめんなさい」以外にしようと思っていたので、これが最後と彼をしっかり正面に見据えた所で先手を打たれた。
「最後だからって、今までありがとうなんて言ったら怒るからね。これでも僕はフラレタ立場なんだから」
結局、填島さんと私が考える事は同じで、見透かされていたらしい。
「じゃ」と「バイバイ」で私達の恋愛ごっこは打ち切られた。
それでもやっぱり、最後に『ありがとう』と思ってしまった私は、きっととても恵まれていたはずだ。

填島さんと別れて、家に帰る途中。気が向いて裏の公園に向かった。ユーキの事は水島さんに伝えておくべきだし。
平日の昼間で、ほとんどの子供はまだ幼稚園か保育園なんだろう。だから、ちかくまで歩いても静かな公園の入り口に、男の子が1人立っていたことに少し驚いた。抜け出してきた子だろうか。
頭の中で近くの幼稚園までの地図を描いていると、中から女性の話し声が聞こえてきた。のぞいてみると、水島さんが女性と話していた。女性の年齢は明らかに私より上、30歳くらいだろうか。
「ねえ、君。お母さんを待ってるの？」
「……うん、あそこのベンチのひとに、あいにきたの」
水島さんに？だけど、この少年もあの女性も幽霊なんだろうか？
疑問に思いながら首を捻っていると、彼女達の話が終わったようで、女性が公園の出口に向かって歩いてきた。左手には結婚指輪。その手を子供と繋いで、女性は公園を出て行った。
振り向いてみると、水島さんの姿が消えていた。あたりを見回してみても、彼女は見当たらない。けれど、一瞬、彼女の柔らかな声が聞こえたような気がした。
「悠紀君に、よろしく言ってくるわ」
彼女の座っていたベンチに、腰掛けてみる。
水島さんはココに座って、ユーキをどんな気持ちで待っていたんだろう。遊びに来る子供を見て何を思っていたんだろう。
しばらくぼーっとしてからふと気付いた。
「そっか……さっきの人だったんだ」
出来るだけやさしく、1回だけベンチを叩いて立ち上がる。
私に大事なきっかけをくれた人。話したのは一度だけだったけれど、とても感謝しきれる相手じゃない。
公園を出るときに振返って、深く頭を下げた。

公園から部屋に戻ると、何故か蒼がいた。

「なんでいるの、っていうかどうやって入ったの」
「悠紀に鍵をもらってたんだ」
話を聞くと、ユーキと蒼は、実は二人で何度も遊びに出ていたらしい。そういや最後にそんな事言ってたな……。
カラオケ、ゲームセンター、映画（男二人で！！）、服やアクセサリを買いに……たった数週間のうちにこれだ。なんなんだ、その仲良し具合は。どうやら私と居ないで家事をしていない時間はほぼ2人で遊んでいたようだ。
「ホ〇か、アンタ達は」
「何言ってんの、俺達はちゃんと女の子が好きですよ」
そして無神経にビリヤードをしながら女性をナンパした話まで始める。
内心ちょっぴりイライラしていると、蒼がニヤッと笑う。
……そうですよね。店一番のホストをやってる男が女性の心理に無神経なわけがないよねぇそうでしょうよ。それで飯を食ってるんだから。
「悠紀がちゃーんと楽しんでたの、分かった？」
多分それが言いたかったんだろう。
えぇ、ちゃんと分かってますよ。ユーキが戻ってきてから私の事だけにかかずらってて申し訳ないなんて、ちょっとしか思ってないんだから。でも、言う事はハッキリ言っておく。
「……最後の話だけは余計。あの子、ちゃんと彼女作ってたんだからね」
「おー、水島さんだっけ。いい人だったなぁ」
知っていたのにか。呆れて言い返す言葉もない。「やっぱりコイツを選んだのは失敗だったか？」と内心思っていると、クローゼットをあさっていた蒼が、大き目のケースを引きずり出す。
「それは……」
ユーキのギターだった。
実家を出るときに新しいギターを買ったユーキが私に渡してくれ

たものだ。それから４年。ずっと、クローゼットにしまわれていて、私も今のいままで思い出すことはなかった。
入っているのはアコースティックのギターが一つ。ユーキが中学に上がったときに親に買ってもらったもので、一緒に親に教えてもらい始めた私もそこそこ弾ける。
だからこそ言いづらいけれど、古い上に放置されていたギターだ。多分もうあちこち傷んだりサビたりしていて、そのままじゃまともに弾けないだろう。
「ごめん、蒼。それ４年間そのままなの」
汚れてるからそのまま部屋であけるな！という意味で伝えたのに、聞いてないふりで蒼はケースを勢いよく開ける。
「ちょっと！」
「……茜、これ手入れされてるんだけど」
「……ほんとに？」
ユーキの仕業以外に考えられなかった。私が居ないときに、埃を払って弦を張り替えて、キレイにしていたんだろう。
空を見上げてありがとうと呟き、ふと思いついた。
「ねぇ、蒼もギター弾けたよね。なんか弾いてよ」
「……わかった」
私に背を向けてあぐらをかいて床に座った蒼が、コードを押さえて静かに弾き始める。
なんでこっちを向かないんだろう。疑問は口にする前にギターの音で上書きされる。
蒼が歌い始めたのは英語だった。
彼の声はなぜかとても耳に心地よくて、歌声はことさらに心を落ち着かせてくれる。
最初は何の歌なのか分からなかったけれど、サビに入って思い出した。
ＮｉｃｋｅｌＢａｃｋのｓｏｍｅｄａｙだ。

心配することないさ
いつの日にか俺がやり遂げられると、君が信じてくれるのなら
いつか分からないけど、どうにかして
全部上手くやってみせるよ
今すぐってわけにはいかないけどね

どうしてほんとに、こいつはこんなにも私の心をまっすぐ捉えてくれるんだろう。
これはきっと、ユーキの事を想っているだけじゃなくて、私のために歌ってくれている彼の唄なんだ。
蒼の優しさが、押さえ込んでいた壁を軽々と切り裂いていくから……ユーキがいなくなって、初めて泣いた。
涙が止まらない。感情が枯れてしまうんじゃないか、っていうくらいに溢れさせながら、静かに叫ぶ。
「アンタ達が仲良く何をしてたとか、そんなことはもうどうでもいいけど」
けど、もう、ふらついたりしないで。
「私だけを見て」
手を止めた蒼が、今まで見たことがないくらい嬉しそうな顔で振り向いて、抱きついてくる。
あぁもう、そんなに嬉しそうな顔をするな。私がいまどんだけ赤くなってるかは自分でわかるけど、普段ひょうひょうとしてるやつが素直だと調子がくるうでしょう。
いつもは何枚も上手《うわて》なくせに、こういう時にまるでユーキとそっくりなのは卑怯じゃないか？
ぼそ、と耳元で囁かれる。
『愛してる』とか『幸せにする』とか、通り一辺倒な言葉を選ばないのが、悔しいくらい胸を打つ。
とりあえず、一生頼れるよう、こいつを更生しよう。
そんな事を考えながら、抱きしめ返した。

私にたくさんのものをくれた彼に、心からの感謝を。

ありがとう、おとうとくん。

ばいばい、ユーキ！

ｓｏｍｅｄａｙ（後書き）

『はい、私の弟は幽霊です。』これにて完結です。
つたない作品ですが、読んでいただきありがとうございました！
活動報告にてちょっと言い訳めいた事を書くかもしれません……
次回作も含めてよかったら覗いてください。
かさねて、最後までお付き合いいただきありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0356u/

はい、私の弟は幽霊です。

2011年7月27日22時37分発行